

■新入生合宿研修を実施

2011年4月2日～3日、環境科学部創設以来の恒例行事である新入生合宿研修がおこなわれました。2007年に締結した雲仙市・長崎県環境部・本学環境科学部の三者連携による「Eキャンレッジ協定」の一環で、2008年より本研修の宿泊先も雲仙温泉になりました。環境科学部玄関前に集合の後、バスで雲仙市仁田峠展望所へ向かい、ここから雲仙普賢岳の溶岩ドームを遠望し、馬越孝道准教授(センター運営委員)から雲仙火山の特徴について解説がありました。夕方には宿泊先の湯元ホテルに到着。早瀬隆司教授(センター長)と深見聡准教授(副センター長)による「雲仙 E キャンレッジ」についての紹介、大野希一氏(島原半島ジオパーク事務局)による島原半島ジオパークの紹介、本学部 2010 年卒業生の多々羅頌子氏(自然公園財団・雲仙お山の情報館)による雲仙の生物など多様な自然環境や“後輩”へのメッセージなどの講話がありました(写真)。



本センターは、E キャンレッジ構想をはじめ、フィールドで学ぶことの意義を学生に感じてもらう第一歩となれるよう、この研修の内容充実に貢献できたらと考えています。

■センター年報『地域環境研究』第3号刊行

2010年度のセンター活動の記録と、地域活動に関する論文5本・シンポジウム記録1本を掲載した年報(全113ページ、300部)を刊行しました。年報は、季刊の本ニューズレターとともにセンターの定期刊行物です。送付希望の方は、センターまでご一報ください。また、センターおよび本学附属図書館のホームページからダウンロードすることもできます。

論文・シンポジウム記録のテーマと著者は次のとおりです。

【論文】

飯香浦地蔵まつりの現在(才津祐美子・洲鎌成子・高谷美玲・水田稚菜・森由里亜)

長崎県小浜温泉地域における湯煙景観の特性

(渡辺貴史・米原大器・川満菜津紀・田代侑子・三原雅文・木下智美)

九州のジオパークに対する観光客のイメージ(深見 聡・有馬貴之)

筑後市の「ごみ分別授業」の実証と考察(中村 修・王 正・遠藤はる奈・岸田友里恵・松田香穂里)

長崎大学環境科学部学生が展開してきた地域における環境活動(荒木翔太・松田香穂里・中島汐理・元永愛菜・中村 修)

【シンポジウム記録】

温泉地における低炭素まちづくりと地域再生 ※ニューズレター第10号記事にあるシンポジウムの詳細を採録。

環境教育研究マネジメントセンター年報	
地域環境研究	
第3号	
2011年5月	
センターの概要	
1.センターの目的	2
2.組織体制	3
3.活動内容	4
2010年度の活動実績	
1.環境学習活動・地域活動の推進	5
2.学内・学外連携の推進	14
3.国際交流・国際連携の推進	19
4.その他	20
地域活動に関する実践報告・論文・シンポジウム記録	
1.飯香浦地蔵まつりの現在(才津祐美子・洲鎌成子・高谷美玲・水田稚菜・森由里亜)	25
2.長崎県小浜温泉地域における湯煙景観の特性(渡辺貴史・米原大器・川満菜津紀・田代侑子・三原雅文・木下智美)	37
3.九州のジオパークに対する観光客のイメージ(深見 聡・有馬貴之)	47
4.筑後市の「ごみ分別授業」の実証と考察(中村 修・王 正・遠藤はる奈・岸田友里恵・松田香穂里)	55
5.長崎大学環境科学部学生が展開してきた地域における環境活動(荒木翔太・松田香穂里・中島汐理・元永愛菜・中村 修)	63
6.シンポジウム記録(温泉地における低炭素まちづくりと地域再生)	69
資料	
1.目次	80
2.環境教育研究マネジメントセンターの概要	87
3.センターの活動内容(概観)	89
環境教育研究マネジメントセンター 長崎大学環境科学部	

■新入生合宿がおこなわれました…………… 1

■センター年報『地域環境研究』第3号刊行…………… 1

■随想 一瀬戸内海に浮かぶ島・祝島…………… 2

■連載 インタビュー 環境科学部プロフェッショナル④…………… 3

長崎まちE探検⑧ 生月島…………… 4

■書架 『身近な地域の環境学』…………… 4

■随想 一瀬戸内海に浮かぶ島・祝島一

3月11日、日本は未曾有の危機に瀕した。東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

東北地方は2か月以上たった今も震災の傷跡が生々しく残り、福島県の一部の地域に至っては一向に復興の兆しが見えない。原因は地震や津波だけではなく、そこにはメルトダウンした原子炉が、放射能を放出しながら立地しているからだ。この事故がきっかけとなり、人々は改めて原発の存在について関心を持ち始めた。そしてより一層自然エネルギーへの期待が高まり、新しいエネルギー革命が起ころうとしているようにも感じられる。

自然エネルギーはコストと普及にかかる時間が膨大であり、政府の補助金なしでは利用が難しいのが現状だ。しかも補助金は永久に交付されるものではなく、以前似たような制度の補助金が打ち切られた後、まるでブームが過ぎ去ったように普及率も一気に低下した。だがこのたびの原発事故で、自然エネルギー活用に追い風が吹いている。ある大企業は太陽光発電をビジネスチャンスととらえ、すぐさま日本各地へのパネルの設置計画に乗り出した。地熱も脚光を浴び始め、新聞やニュースで頻繁に取り上げられるようになった。自然を相手にするため課題も多い。しかし立ち足らぬ問題の壁に挑まなければならない時が、今来ている。



波が穏やかな瀬戸内海に、静かに浮かぶ島がある。名を祝島と言ひ、全国各地から釣りの愛好家が集まる、人口およそ500人の自然豊かな島だ。島民のほとんどが第一次産業で生計を立て、山と海の恵みと共に生きている。その目と鼻の先で、原子力発電所の建設計画が進んできた。島民は自分たちの子孫と、その子たちが暮らす環境を守るため



祝島で配られている絵はがき



祝島にみられる独特の練り堀

30年以上も抗議行動を続けている。これに関するドキュメンタリー映画『ミツバチの羽音と地球の回転』『祝の島』が、現在公開中である。今年の夏から本格的な工事が行われる様子だったが、原発事故を受け計画が中断された。今後工事がどうなるかは分からないが、島の人々は『自然エネルギー100%プロジェクト』を開始するという。彼らはエネルギーを、食糧生産や人間の力すべてを含んだものと捉えている。「島の生活、そのすべてがエネルギー」なのである。彼らの考え方は、今後のエネルギー政策の鍵となってくるのではないだろうか。エコな

考え方が単なるブームで終わらないよう、現代の生活スタイルも含めて、私たちはエネルギーのあり方をもう一度見直していかなければならない。

(取材=4年 香川菜美)

■連載

学生が聞き手のインタビュー企画

環境科学部 プロフェッショナル

第4回 菅原 潤 先生

—勉強以外で熱中していたことはありますか？

菅原先生 「人形劇ですね。文学部以外の人と交流することで、新たな視点を得ることが出来たし、当時会った人達とは今でもつながりがあるほどです。」

—哲学に興味を持ったきっかけは何でしょう？

菅原先生 「まず『デビルマン』を見て「悪と神話」に対して考え始めたのが一番のきっかけと言えます。そして仏教について研究可能かつ必須のしぼりが少ない西洋哲学、その中でも「悪と神話」について追及できるシェリング哲学を専門に選んで今に至ります。」

—就職しようとする気は無かったですか？

菅原先生 「無くはなかったが、教員免許を持って教職以外の面接に行くと「教師にならないのは何故？」等と面接で尋ねられると聞き、この道に進むしか方法は無いと覚悟を決めました。また大学院時代に結婚した妻が公務員として働いてくれていたお陰で、閉鎖的な大学という場所に留まり続けても世間の常識からずれずに済みましたね。」

—先生の授業の中で、学生はどんな反応をしていますか？

菅原先生 「授業を面白いと思われているかとか、今日はあまり理解できていないなというのは雰囲気分かるんですよ。この力は、人形劇の経験で鍛えられましたね。劇を見ている子供っているのは正直だから、顔が見えなくても雰囲気伝わってくるんですよ。」

—今の研究内容について教えてください

菅原先生 「日本の哲学が戦争からどういう影響を受けているのかについて研究しています。」

—最後に、学生に一言お願いします。

菅原先生 「自分にとって『長続きする好きなもの』をぜひ見つけてください。人に合わせた趣味ではなくて、たとえ人付き合いが変わったとしてもずっと好きでいられるものを大切にしてほしいですね。」

—ありがとうございました



菅原先生と3年のゼミ生たち

(聞き手=4年 木下智美、3年 峯 美枝)

□事務局だより□

環境教育研究マネジメントセンターの新年度における運営体制(センター運営委員)をお知らせ致します。

早瀬隆司教授(センター長、環境政策)、深見聡准教授(副センター長、観光地理学)、葉柳和則教授(副学部長、文化社会学)、馬越孝道准教授(火山学・地震学)、中村修准教授(環境経済)、西山雅也准教授(環境生物化学・土壌圏科学)、福島邦夫教授(民俗学)、吉田謙太郎教授(環境経済学)、渡辺貴史准教授(地域計画学)、石井浩二環境科学部支援課長

■連載

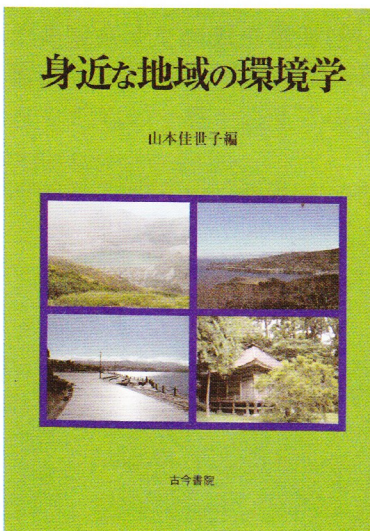
長崎まち **エコ** 探検⑧ いきつき 生月島

街なかを歩いていると、何気ない景観に意外な歴史や人びとの思いが詰まっているのを知ることがある。本コーナーでは、そのような長崎の隠れた自然・歴史・文化などのさまざまなスポットをご紹介します。



1991年、長さ960mの生月大橋が開通し、平戸島との往来が可能になった。キリスト教を伝えたザビエルは平戸を複数回訪れ布教に力を入れ、生月にも多くの信者が誕生した。島の西側の海岸は絶壁の名勝として西海国立公園の一部に指定されている。島の北端には大礮鼻(おおばえ)灯台があり、水平線に沈む夕陽がとても人気のスポットになっている。(取材=4年 山口明日香)

■書架



『身近な地域の環境学』

(山本佳世子編著、古今書院刊、2010年、¥3,990)

身近な自然と文化を「地域環境」ととらえ、それらを保全や改善・活用していく人材の育成に焦点をあて、市民が中心となる様々な環境活動を紹介している。

活動の担い手の育成の拡充にとめない、多様な切り口からそれに応えていく市民や行政・学校などの協働の重要性を、改めて認識させてくれる。とくに、子どもの遊びをとおした環境学習に言及する第8章は、子どもたちの遊びを大人はどのように支援できるかという課題は予想以上に深刻化していることが何われ興味深かった。

実際の地域環境に関わる活動がどのような展望をもっていくべきかを学べるお薦めの一冊である。

□ ■ 編集後記 □ ■

第11号をお届けします。4月より、環境科学部の全教員は大学院の部局化にとめない新設の大学院水産・環境科学総合研究科の所属となりましたが、従来通り、環境科学部学生の教育研究指導ならびにセンターも学部内施設として変わらず活動を継続しています。センターの充実にもさらに努めていきたいと思っております。／定期購読も受付中。郵送料のみでお手元にお届けします。詳細はお気軽にご連絡を。／ニューズレター第12号は、8月25日付で発行予定です。(深見)

環境教育研究マネジメントセンター News Letter (第11号)

2011年5月25日発行

長崎大学環境科学部環境教育研究マネジメントセンター
〒852-8521 長崎市文教町1-14

URL <http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/>

Tel&Fax 095-819-2720(深見聡研究室気付)

E-mail fukami@nagasaki-u.ac.jp

(編集長：深見 聡)

印刷：川口印刷(株)